

小児後天性中枢神経脱髄症候群の診断基準（案）

班 員 酒井 康成¹、野村 芳子²

共同研究者 日本小児免疫性脳炎研究グループ

石崎 義人¹、實藤 雅文¹、鳥巢 浩幸³、吉良 龍太郎⁴、原 寿郎⁴

大賀 正一¹

研究要旨

我々は 2008~09 年に小児後天性脱髄症候群に対する臨床全国調査を実施し、本邦における多発性硬化症（MS）、Clinically isolated syndrome（CIS）、急性散在性脳脊髄炎（ADEM）および視神経脊髄炎（NMO）の発症頻度と罹患率を報告した[1]。この中で、日本人 MS では ADEM に比べ初発時に視力障害を来した児の割合が高い（52% vs. 11%）ことを明らかにした。また初回脱髄事象時の視力症状は、日本人小児 MS の特徴である可能性が示唆された。本調査期間内に視神経炎（ON）と診断された小児は 11 人であった。ON 罹患児はいずれも初発時に視力障害を来していた。ON 症例の画像的特徴と全国調査後の診断について、縦断的に追跡調査する必要があると考えられた。

研究目的

後天性中枢神経脱髄症候群は、中枢神経系の炎症性脱髄を特徴とする臨床症候群であり、多発性硬化症（MS）、Clinically isolated syndrome（CIS）、急性散在性脳脊髄炎（ADEM）および視神経脊髄炎（NMO）に分類される。我々は 2008~09 年に臨床全国調査を実施し、本邦における小児 ADS の発症頻度と罹患率を明らかにした[1,2]。この中で日本人の小児 MS は、初発時に視力障害を示すことが特徴的であった。日本における小児 MS と視神経炎（ON）の鑑別に有用な診断基準を作成するために、前回調査時に診断された ON 児を再度抽出した。

研究方法

山口らの調査データを再解析した[1]。著者らの利益相反なし。

結果

調査期間内に 11 人の ON 児を同定した。いずれも初発時に視力障害を来しており、調査期間 3 年間での再発はなかった。調査期間中に ON から他の脱髄性疾患に移行した児の割合は不明であった。

1 九州大学小児科

2 野村芳子小児神経学クリニック

3 福岡歯科大学小児科

4 福岡市立こども病院

考察・結論

過去の文献を検索すると、MS に移行した小児 ON 例は 15-36%であった[3]。初発時に視力障害を来しやすい本邦の小児 MS の特徴を考慮すると、上記調査終了後に他の脱髄性疾患に移行した児の実数、神経画像および臨床的特徴を明らかにする必要があると考えられた。

文 献

- [1] Yamaguchi Y, Torisu H, Kira R, Ishizaki Y, Sakai Y, Sanefuji M, et al. A nationwide survey of pediatric acquired demyelinating syndromes in Japan. *Neurology*. 2016; 87:2006-2015
- [2] Torisu H, Kira R, Ishizaki Y, Sanefuji M, Yamaguchi Y, et al. Clinical study of childhood acute disseminated encephalomyelitis, multiple sclerosis, and acute transverse myelitis in Fukuoka Prefecture, Japan. *Brain Dev*. 2010; 32:454-62.
- [3] Mizota A, Niimura M, Adachi-Usami E. Clinical characteristics of Japanese children with optic neuritis. *Pediatr Neurol*. 2004;31:42-5

健康危険情報

なし

知的財産権の出願・登録状況

特許取得：なし

実用新案登録：なし